

「キー」かな？ ちがう。ヘキユー」かな？ 「イー」かもしれぬ。

日常で自分がいかに、決まりきった感覚に頼って、音を表現しているか、わかってきました。

そこにアンディさんの声。

「誰も、動くな、なんて言っていますよ。なぜ、みんな止まっているんですか？」

どうやら頭のなかには、「自ら勝手につくりあげた、きまり」もあつたようです。

■ひとを殴ったり、蹴ったり、「抑圧」してみる

輪になって座る参加者に向かって、「5、6人の方、手伝いをお願いします」と呼びかけるアンディさん。

歩み出た参加者のなかから、さらにひとりが選ばれました。そして、

「それでは、出てきてくれた方々は、このひとに思いきり、暴力をふるってください。もちろんフリですが、本気でやってください。やられるひとは、本当に痛がってください」

暴力をふるう役になったひとは、躊躇し、はじめはこわごわ、一発ずつ、



ひとりのひとを「抑圧」のポーズで取り囲む

殴るふりをしています。しかしそのうち「暴力をふるわなくてはいけない状況」に慣れてくるのか、スピードも強さも上がってきます。暴力を加えられる側は、倒れて、頭を抱え、必死で身を守ろうとします。

周りで見ているほかの参加者も、つらく、イヤな雰囲気になります。ほんの数分間ですが、ここでは、演じるひとにも見るひとにも、笑顔はありませんでした。

次は参加者全員で「抑圧」のイメージをつくります。

抑圧を受ける役には選ばれたひとりが床に寝そべります。ほかの参加者はそれぞれ、その周りを取り囲むようにしながら、抑圧をイメージするポーズとります。全員が参加すると、抑圧を受けているひとの姿はすっかり隠れてしまいました。

暴力と抑圧のワークを終えたとき、次のワークのために、いまの気持ちを覚えておいてほしい、とアンディさんは言いました。

「たのしい気持ちから暴力は生まれぬ」 アンディ・ヒクソンさん



Andy Hickson ●イギリスを拠点に活動する劇団「タイ・ツアーズ」の主宰者のひとりであり、脚本家。いじめや暴力の本質を訴える演劇や、「非暴力アクションワークショップ」を世界各地で行う。

子どものころの2年間、マレーシアのテナという先住民の地に住んでいたことがあります。その間、一度も暴力を目にしませんでした。テナのひと全員が暴力をふるわないわけではないでしょう。記録によれば、復讐することもあると言います。けれどもテナはマレーシア国内でも非暴力民族と呼ばれています。

民族文化的に東南アジアのひとびとは、自分と他人との境界線が薄く、他人のことを自分のことのように思う文化があると言われます。だから他人への危害を、自分への危害と感ずることができると言います。テナのひとびとは、いまなおそうした感覚を幼いうちから身につけるのです。

「非暴力アクションワークショップ」は、テナでの経験だけをもとにつくったものではありません。ほかにもほくは、世界のいろいろな地域でいろいろな生活習慣や職業を経験しました。漁師もナイトクラブのマネージャーもボクサーも、ぶどう農園の農夫もしました。いまは劇もつくります。けれど、それがどういふことだったとか、分析したり型にはめることは、好きではありません。

ません。世の中では型にはめることがたくさんありますが、それ自体が暴力的なことです。

たとえば、暴力と非暴力の間には非常に薄い壁しかありません。

ワークショップのなかで、暴力をポーズで表現するワークをしました。そのあとで、2カ所だけポーズを変えるわけですが、参加者はみんな、ポーズから暴力を取り除くことができたと思います。これは日常生活でも同じことです。暴力は怒りから起るのですが、怒りは暴力ではない形にも変えられるのです。そのことを、体験として知ってほしいんです。

わたしたちは日常生活のなかで多様な暴力を体験しています。「いじめ」にしても、ほかのひとにとってはただのあそびかもしれません。けれども、誰かが暴力だと感じることは真剣に受けとめなければいけないのです。そして誰もが被害者にも加害者にもなることを覚えてほしい。暴力が良い・悪いと定義するだけでは、何も変えられないのです。

確かなことは、「たのしいと感じているときに、暴力は生まれぬ」ということ。ほかのワークショップでは講義はしたくない。たのしくやりたいと思っています。そのひとたちが自分のなかにある力を、自分の感覚で感じてほしい。とくに年齢が低いひとほど、ことばで言うよりも、同じ年齢のひとから聞く情報のほうがよっぽど受け止めやすく、意味があるんです。

■ジェンダーを感じてみる

「今度は全員何かの動物になりきって、部屋を歩き回ります。自分が何の動物なのかは、言っただけじゃありません。」

ここでは、鳴き声もいけません。その動物の気持ちになり、しぐさだけで表現してください。その動物は何を食べますか？ どう寝ますか？ どんな場所が好きですか？ 周りのひとの様子も、よく観察してください。」

次に箱の中から、ちいさくたたまれた紙をひとつ取り、周りのひとに見えないように紙を開きます。

書かれていたのは「メスの象」。メスであることを意識しながら象の気持ちになってみます。

ゆっくり、大きく見えるように。鼻や耳がよく動くことがわかるように。高い枝の葉を食べたりもしてみます。

「大きいと、高い所のことば簡単だけど、足元のことばたいへん。恐いものは少なそうだけど、俊敏さはないな」



といった感想が頭に浮かびます。

ほかの参加者たちは、しゃがんで飛び跳ねたり、部屋の隅のほうで何かにつかまったりしています。床を這っているひともあります。

ふと、メスであることを思いだし、どう表現するべきか悩みます。象のメスらしさとは？ 悩んでいるうちに時間切れになり、アンディさんの声がありました。

「実はそれぞれの動物には、オスとメスがあります。全員そのまま、自分とペアになる相手を探してください。声はまだ出さずに、動きだけで判断してください」

さっそく、「オスの象」探しをはじめます。予想をつけたひとの近くへ行き、耳をパタパタさせて合図をします。相手も同じしぐさをしてくれるところを見ると、どうやら同じ、「象」のようです。うれしさのあまり思わず抱き合い、いっしょに座ります。

全員が座ったところで正体を明かし合おうと、やはり相手は「オスの象」でした。大半はペアを見つけられたようですが、なかには違う動物同士のペアもあるようです。アンディさんは、

「いまのはジェンダーのゲームです。動物はしぐさや行動でオスカメスカはわかりません。みなさんは「オス」や「メス」をどう捉え、表現しましたか？」

参加者から挙がった声はせいぜい、「自分はオスの役だったので、強そうにした」というもの。実はほとんどのひとが、性差の表現には悩んでいたようです。「オスらしさ」や「メスらしさ」は、人間だけが刷り込まれているものだと

自分や他人の感情を

ことばにする 演じてみる

■「抑圧」を話し合おう

ゲームのようなさまざまなワークのあと、車座に座っている参加者たちに、アンディさんが問いかけます。

「みなさんは、「抑圧」ということばを聞いて、どんなイメージが浮かびますか？」

つらい、争い、押さえつける、黒っぽい、命令される、社会、家庭、ルール、束縛、組織、上司、「ほっといて!」、義理の母……

ときどき、笑いや同調の声が交じりながら、たくさん意見が出てきます。アンディさんはそれをすべて、ホワイトボードに書き出していきます。

イメージが出尽くしたところ、アンディさんは話し出しました。

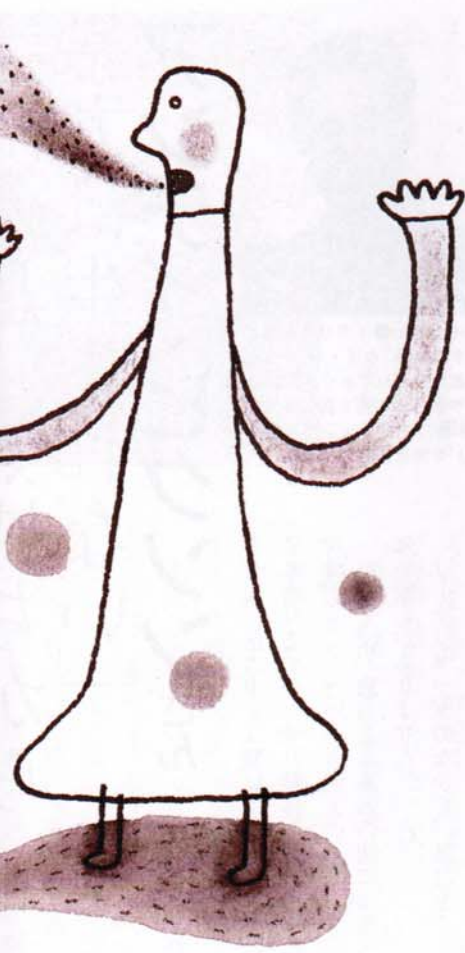
「世の中にはいろいろな抑圧があります。目に見えないものもあります。も

しも、いまここに出た意見のなかに、

「自分は抑圧とは思わない」というものがあつたとしても、誰かにとつてはそれが抑圧なのだという事実を認めなければなりません。そして、誰かが抑圧を感じているときは、社会全体でその問題と真摯に向き合わなくてはなりません。

抑圧は暴力です。ひとりひとりが受ける暴力を減らしていくことが、非暴力につながるのですから」

抑圧について、全員で話し合ったあと、参加者たちは再び、知らない同士でペアになります。そして、なるべく他のペアと離れ、自分自身が受けている抑圧、見聞きした抑圧について話し合います。もちろん、話したくない内容は話さなくていいし、名前や場所は伏せても構いません。



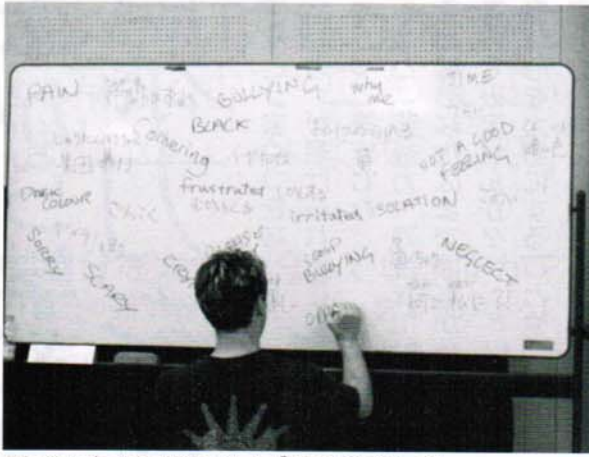
それでも、周りをそつと見回すと、手ぶりも加え、熱心に話している参加者が少なくないようです。

■話し合ったことを劇にして それぞれ役を演じてみる

一定の時間がくると、また別のメンバーで、5、6人のグループをつくります。そこでは全員が、いま自分が聞いた話から、抑圧の要素を少しずつ取り出して話し、グループでひとつのストーリーにまとめていきます。つまりこれが、シナリオになるのです。

抑圧を受けているのは誰か。抑圧しているひとは誰か。どんな場所で起きているのか。そこに、どういう役の人物を加えていくか……。

あらゆる設定が決まったら、実際に劇として見せるために、セリフを覚え、動きを考え、表情を工夫します。劇が完成すると、各グループがそれぞれ発



ホワイトボードを埋めつくした「抑圧」のイメージ

表することに。

働く女性が受けている抑圧、家庭で専業主婦が受けている抑圧、子どもが親から受ける抑圧……。どれも、身近にいくらでもありそうな、リアルなものばかりです。

各グループが劇を演じ終わると、その劇を題材に、参加者全員で話し合います。主人公が受けている抑圧を取り除くには、誰がどう行動するべきか。そしてさらに、もうワンステップ。

ひとつの劇をアトラランダムに選び出して演じながら、抑圧をなくすための新しいセリフを加えることで、劇をつくり変えていくのです。

それはたとえば、劇のなかで抑圧を受けている人物のセリフを、

「おかあさんの言うことは、わたしのためじゃない。おかあさんはもつと自分のために人生を生きて！」と変えたり、

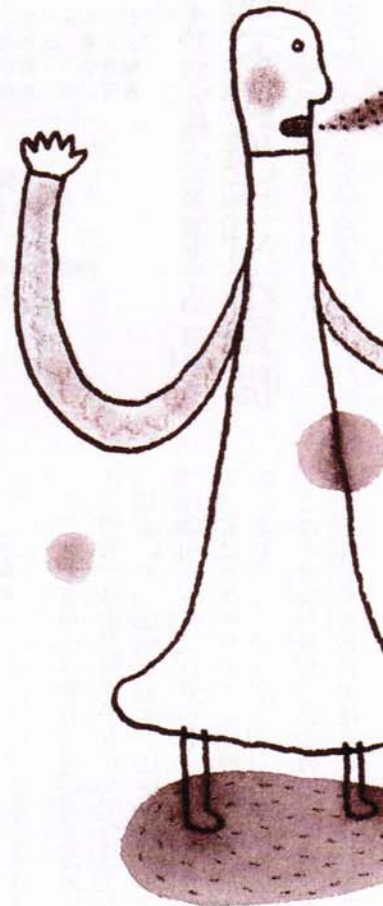


「暴力」を輪になって話し合う

「あなたの考えを押しつけないで！」というセリフを加えることなのです。

他のグループの劇を見ていて、感じたことがあります。それは、劇に出てくる人物が、どこかすべて自分と重なるということ。抑圧を受ける側も、抑圧する側も、それを見ても何もしない傍観者も、すべて自分のなかに存在し、そうなのです。

このへ非暴力アクションワークショップのいちばんの特長は、決められたシナリオをロールプレイするのは



劇のシナリオを考える

なく、ストーリー自体を、参加者たちがつくりあげていく点です。

あくまでも芝居として、架空の人物を演じることに大きな意味がある、とアンディさんは言います。

「自分自身が抑圧を受けているとき、ストーリーを自らの体験でつくりあげるのとはつらい作業です。それはまだ、傷が癒えていないことが多いからです。

このワークでは、抑圧に関する非常に個人的な出来ごとを、聞いたり、話したりしますが、それが誰のことか分からないようにすることが大切です。

それは、すべてが他人の話であり、また自分の話でもあるからです。

自分だけのストーリーでは、もしも自分が被害者であると同時に、無意識に誰かを抑圧していたとしても、それに気づくことはできません。自分とは違う場所に住み、立場も悩みも違うひとの話だけれど、これも抑圧なんだ、と感じることが重要なのです」

自分の体験を打ち明け、痛みを他者と分かち合い、軽減することはもちろん重要です。そこに加えて、「相手がなぜ抑圧をしてしまうのか」「抑圧を生む社会のしくみ」に気づいていくことこそ、この演劇ワークのねらいなのです。